

村松友視

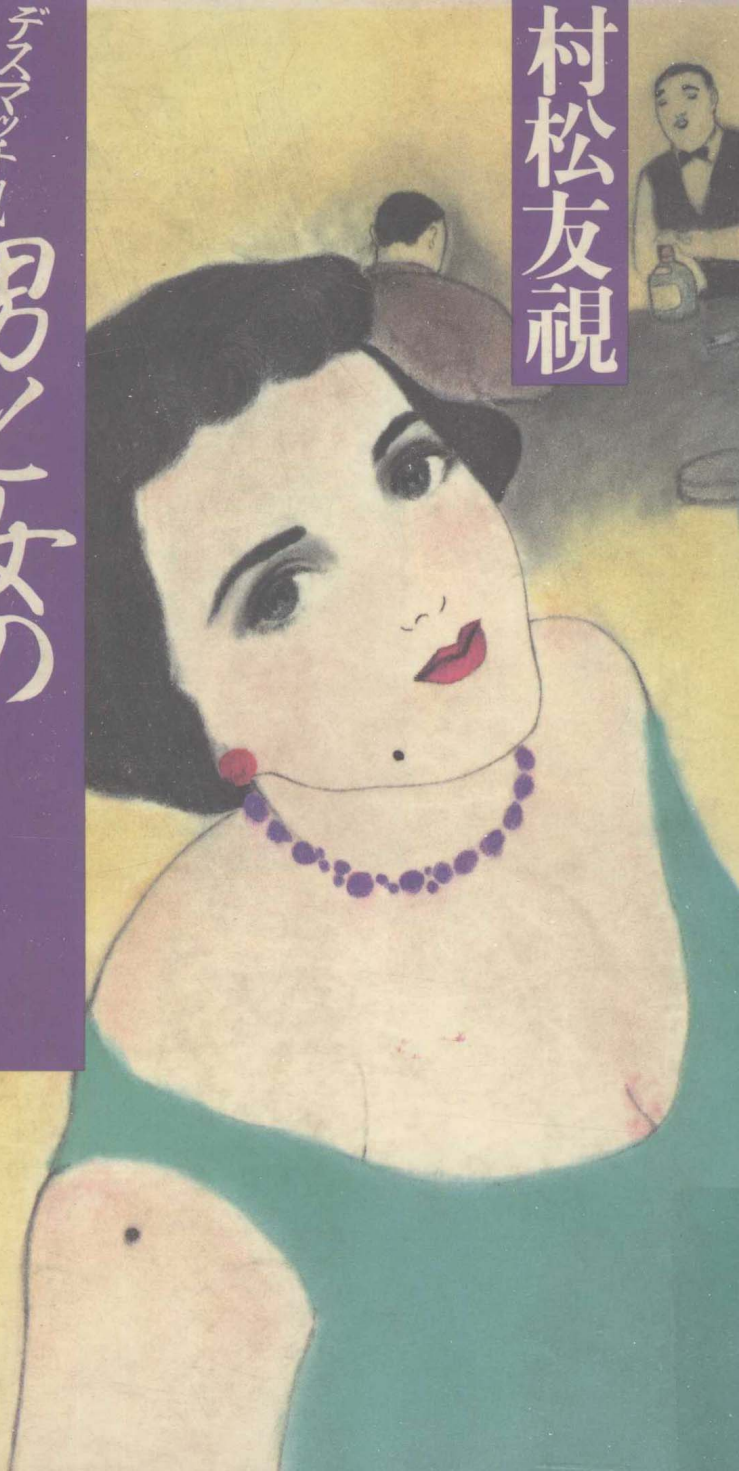
デスマッチ風

男と女の

どんぶり

ショート・ショート井

発行 徳間書店
発売 現代史出版会



村松友視

デス
マツチ風

男と女の

とんぶり

ショート・ショート井

発売
発行

徳間書店
現代史出版会

むらまつ・ともみ

1940年東京生まれ。

主な著書——『私、プロレスの味方です』『当然、プロレスの味方です』『ダーティ・ヒロイズム宣言』（いずれも情報センター出版局）『男と女 心やさしきデスマッチ』（現代史出版会）『最後のベビー・フェイス』（角川書店）『悲劇のように』（福武書店）。創作「セミ・ファイナル」は1981年度下半期直木賞候補。「泪橋」は1982年度上半期直木賞候補（いずれも『野性時代』）。

デスマッチ風

男と女のショート・ショート井

著者——村松友規

発行者——徳間康快

印刷所——ミツワ印刷・真生印刷

製本所——ナショナル製本

発行所——株式会社 現代史出版会

東京都港区新橋三—〇—九 第五兼坂ビル

電話 四三—二—四九

郵便番号 一〇五

発売——株式会社 徳間書店

東京都港区新橋四—〇—一

電話 四三—六—三一（代）

振替 東京四—四四三—九二

郵便番号 一〇五

装幀 川畑博昭

デスマッチ風
男と女のショート・ショート

井 よんがら

目次

男と女 屁理屈の世界

8 屁理屈の世界

12 ジェンナーの妻

16 永遠の五分

21 火にあたろう！

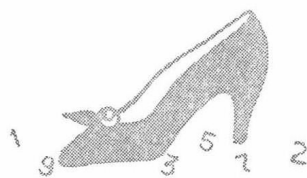
24 正統的な火の借り方、教えます
極め付（伊達の研究）

32 不眠症

36 悩める百足
むか

39 顔なんて

42 銭湯とフラットホーム



極め付（伊達の研究）
フラットホームは人生の踊り場 46

プッシュ・ボタン式 53

独り言は何時ひらく 58

ひとさらいの唄 62

極め付（伊達の研究）
星空の下、ラーメンをすする 65

地球の最期 74

つり堀の釣 78

バス・タオル 81

ショート・ケーキ 85

極め付（伊達の研究）
赤信号、わざと守れば美学あり 89

男と女 色つき立体人生

- 100 色つき立体人生
- 104 私って損ね……
- 107 未必の故意
- 112 興信所の利用法
- 115 ヤキトリ屋の子連れ狼
極め付伊達の研究
- 123 居直った造花
- 127 噂は噂を……
- 132 地獄に堕ちた弱者ども
- 136 ほめ言葉



- 極め付伊達の研究
人とすれ違うときはハイヌーン・スタイルで
139
- 残暑お見舞
147
- 拾った原稿
151
- 変貌
155
- 極め付伊達の研究
へ熱のア・ラ・カルト
158
- ドライ・フラワー
171
- 煙草を喫えないカウ・ボーイ
176
- 時には……
179
- 極め付伊達の研究
密室（ミステリー）のクールなそそのかし
183

男と女 散らかった気分

192 散らかった気分

195 恥の白粉せむぎ

199 幽霊とお化け

203 気の小さい男

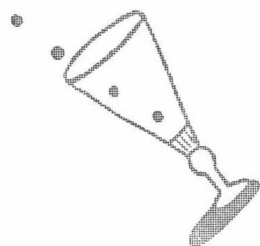
206 改札口は心のエア・ポケット
極め付(伊達の研究)

214 シャワーとお風呂

218 肉体のうめき

222 尾刈都式殺人

226 靴みがきのダンディズムは日活風に甦った
極め付(伊達の研究)



中途半端なインテリ

234 はじめの論理

242 喋って飲む酒

245 窓越しに男と女が対峙する
極め付(伊達の研究)

253 恐怖の所作事

257 アザのある人生

261 戦後の陽ざし

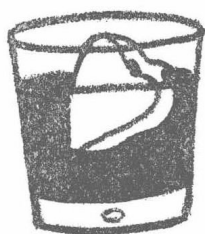
265 東京の元日は放課後の匂い
極め付(伊達の研究)

275 あとがき

デスマッチ風
男と女のショート・ショート井

とんがり

男と女
尻理屈の世界



屁理屈の世界

屁理屈を言うんじゃない……そう言って私はよく叱られた。火鉢の灰を掻き回しながら鼻水を啜り、左手で鬢のほつれ毛をたくし上げ、先ほど灰の中へ刺し込んだ火鋏を引き抜いては唾をつけた指で熱し具合を確かめ、じゅっという音と共に湯気がたちのぼると、無表情に脇の着物を引き寄せ、鋏を当てている。かと思えば脇の鉄瓶を五徳からずらせて調節し、首を伸ばして縁側の猫の昼寝を見やったついでに私に眼を向け、仏壇の菓子をおろしてもいいからと合図をする。勢いよく立ち上がって仏壇の干菓子を二つ手にもち、ひとつを祖母の脇へ置いた私に、もう一度祖母の小言が重なってくる。……屁理屈を言っていると偉い人になれないからね。

あの祖母の囁れ声は、いまだに私の耳にしばしば甦るのだ。その度に私は首をすくめて上目遣いをするような気分になり、「屁理屈」という言葉を反復する。

屁理屈という言葉の上に「屁」という文字を乗つけたこの単語は、どう考えても重みのない、それ

こそ屁のような響きをもっている。私は、自分が何かを主張しようとして言葉を発するとき、

「これは屁理屈ではないかな」

と疑う癖がついている。

「今日は寒いから、熱カンで一杯」

などというのも屁理屈かも知れないと思って、心ならずも冷酒を飲んで寒々しい思いを噛みしめたりもする。

「もう遅いから寝ようかな」

と思うのも屁理屈かと思って床に入らず、徹夜をして眼を赤くし、不節制を忠告されたりするうち、私は極度の寡黙^{かもく}に陥っていったのだ。何かを思えば、それがぜんぶ屁理屈のように思えてくるのである。屁理屈以外のことは、いったい何だろうと探しあぐねて坐り込み、俺は生まれつき屁理屈と縁が切れないようになっているのだろうかと嘆いたりもした。

しかし、屁を我慢して死んだ人もいるというではないか。我慢して死ぬとすれば、生きるためには屁を出さねばならない。屁を出せば生きのびることが出来ようというものだ。

何処^{いずこ}にて始末するのか娘の屁

こんな川柳があった。お茶の会などで青くなって緊張しているお嬢さんだって、何処かで始末し

ているらしい。それでも、屁も放らないような顔をしている。そんなことが励みになったりもした。そして、私は自分の頭に浮かんでくる屁理屈を、ともかくも口から外に出すことにしたのである。何しろ、死んじゃうよりいいからね。だが……

屁をひって可笑しくもない独り者

という川柳もある。ひとりで屁理屈を吐き出しつづけているうちに、部屋じゅうが屁理屈で充満し、何とも息苦しい棲心地となっていた。といって、テレビの奇人変人コーナーへ出て屁の曲吹きやローソク消しなどの芸当をやつてのける少年のように、自分の屁のこきつぷりに自信があるはずもない。他人の前などへ出てゆけば、音は鳴らずローソクは消えず、恥をかいて家へ帰り、ふたたび祖母の「だから言つたじゃないの。屁理屈を言うんじゃないよって！」という機嫌のわるい呟きが耳に響くのがオチである。

アナを掘って不満をぶちまける話があるが、不満というわけではないので、大声で怒鳴る爽快感というものも、屁理屈にはともなわれない。出せば溜飲が下るといふほど大袈裟なものでもないのだ。出さないでいると気持がわるく、変に鬱積するだけなのだから……。

音も香もボンと消えゆく田植えの屁

こんなのどかな川柳もあった。このような、大地と生理が一体となった境地は、それこそ、屁理屈の世界ではない。もっと根本的な、大それた世界である。屁理屈と屁は、やはり似て非なるものらしい。屁は人間の根源的な生理であり、大地と手をつなぐこともできるほどの確かなる存在らしいのだ。それにひきかえ、屁理屈は、何ともウジウジした、勢いの悪い、確立のしにくい世界なのである。となると、やはり身の因果を悔やみつ、ウジウジとくらすのが私の宿命なのだろうか。祖母の言いつけを守らなかったむくいは、逃れることのできぬ蜘蛛の糸となつて、私をがんじがらめにしてゐるのだろうか。私はふたたび密室の囚れ人のように堂々めぐりを始めたのである。

屁をひつて可笑しくもない独り者

ここまで戻つて、私の生き方は決定した。いや、決定したというより、残された生き方はこれより無いという形で、結果的に決つてしまつたのだ。つまり、屁をひつて自分で笑いこぼる人生、それが私に残された唯一のものであり、それ以外に仕方がないということなのである。

それに、屁理屈という言葉は、条件反射のように今は亡き祖母の姿を導き出してくれる。混り合つた屑毛糸で不思議な模様のセーターを編んでくれた祖母の手のように、心もとない仕種をくりかえして生きようか。火鉢の灰に火箸で波形を描き、独り言を呟いていた祖母のように、無意味な習性を守りつづけようか。さしたる感動も表わさず、しかし毎日欠かさず仏壇に灯明をつけ、般若心

経^{きやう}を欠かさなかった祖母のように、勢いわるく人生をやり過^{すご}してゆこうか。ともかく、屁理屈を言うなど言いきかせた祖母の望みと裏腹に、私は、屁理屈に頼^{たの}って生きる決心をしてしまった。雄雄しい男道を教えようと躍^{やっ}起^きになった祖母だが、私の人生は男道の表通りから外れる一方だ。毎日毎日、新聞の人生相談欄^{らん}だけを読み耽^はり、腹を立てたり涙を流したりして、みずからの軌跡と対照させていた老婆のように、呟^{ささ}きに満ちたものとなってしまった。教育は、こんな顛末^{てんまつ}をたどることもあるのだ。

さて、この本、そういう私の屁理屈の羅列とでもいえようか。些細な^{ささい}ことへと傾斜^{けいせつ}する繰言^{くりご}をしばし陽光^{きやう}に晒^{さら}し、虫干しをして長持ちをさせようという儂^{はかな}いロマンかも知れない。祖母の小言が、また一段と大きくなって私の耳に響くようである。

ジェンナーの妻

ジェンナーと、ジェンナーの妻とは、どちらが大胆な人間だろうか。男と女とはどっちが大胆

かということを想うとき、私はかならずジェンナー夫妻のことを頭に浮かべる。もちろん、答えははじめから決っている、大胆なのは女であることはわかってゐるのだが、女は優しく男は雄々しいなどという俗説に、つい心が弱くなつたときに、そんなことあるもんか、それは偽りだ、嘘だ、方便だという確認をするために思ひ浮かべるのである。

第一、私はこの夫婦はあまり好きでない。種痘の発見が人類にもたらした効果は認めてやつたとしても、子供に対するかかわり方は、二人とも実にいやらしいのだ。

どちらが大胆かというお話でしたな、失礼……つまり、わが研究の成果をわが手によつて、という実感に支えられて、はじめてわが子を実験台にする決意をしたジェンナーとですね、わが夫を信じるという一点でわが子を夫にまかせた夫人との関係であります。この「わが」の果ての答えはやはり決つておりました。大胆なのは夫人である。

しかし、信じるとはいつたいなんだろう。自分を信じなければ他人を信じるワケがない。自分を信じることができずか、四六時中、どんな状態の自分をも……とんでもないことである。私などは、一生たった一度でも、自分を信じたという瞬間があれば、この世に生を受けたことを花輪でかざりたいという気にさえなるだろう。いや、私のことはともかく、信じるという行為は奇妙なことでありませう。相手を信じてゐる自分自身に疑いをもつことで簡単にくずれちゃう不確かなものなのだから。それにしても、女のヒトはよく信じるからなあ。あなた、ワタシが信じられないの！ な

んて平気で言ったりする。アタシ、自分自身が信じられなくなっちゃったわ！　なんて不思議そうな顔してつぶやいたりする。

——ああ、君は今とっても良いことに気がついてるんだよ、自分自身も信じられないことに気づいたんだね、オオ、イイコイコ、本当はね、信じているほうが不思議なんだよ、いやあ、とにかく素晴らしい、君は開眼したんだねえ、感激だなあ……。

なんて言おうものなら、左のホオを殴られるのがオチである。まったく正直な感想というのは発表しにくいものだ。

とは言うものの……である。人間が何かをしようとするとき、つまり行為を起こそうとするときには、実は、信じるより仕方がない。哲学の世界でも、行為のことを判断中止（考えることを断念したということ）などと言っているのです。『徹底的に考えた行為でありましてエ』、というのは正しくない。『徹底的に考えた末、ついに考えることをやめちゃった結果の行為でありましてエ』という表現を用いるべきである。考えるという理性的段階から、信じるという非理性的段階へ移行したということなのです。

スナックKのママのS子嬢は、信じることの不思議さを知った上で、いろいろなことを信じているようだ。彼女の信じ方は丸い顔の人は円満で、唇の薄い人は薄情でといったようなレベルである。方角や旅立ちを気にする素朴さである。かといって宗教を信じるワケでもない、つまり、人間